

ヤナセ天然スギの今後の取扱いに関する検討委員会(第2回)議事概要

大径木を伐るには、バーが1 m以上もあるチェーンソーを使いこなす技術も必要。地元の森林組合では数人が使えるものの高齢化が進んでいる状況にある。技術の継承といった観点から考えると、急な伐採の取り止めとならない。道路沿いを架線集材で出していけば長い期間出せるのではないか。

休止をすれば130年生の人工林が出材されるまで20年近く間が空くことになる。伐採する技術、製材する技術をどのように継承していくか。ヤナセ天然スギのブランドを引っ張ってきた材が無くなり、130年生の人工林をブランド化していくにしても期間が空きすぎではないか。なんとか細く長くヤナセ天然スギを出していく方法はないか。

伐採する大径木の資源量が少なくなっていることを認識してほしい。中小径木が残っているので、それらを育てていくことも考えないといけない。人工林への引き継ぎについては、人工林材が天然林材と同じように使われるのか、どういう需要があるのか等を把握しつつ、人工林材の供給を検討する必要がある。

100年生の人工林を見たが立派に成長しており、130年生にこだわる必要もないのではないか。高齢級人工林の伐期のあり方を再検討してみてはどうか。技術の継承の問題は、人工林であっても大径材は出てくるので、天然スギから高齢級の人工林への継続性も出てくるのではないか。

千本山保護林にはかなりの量の天然スギが残されているが、これ以上に残す必要があるのか。現状では、全国からヤナセ天然スギがないか問い合わせが来る状況である。ヤナセ天然スギを全国に出材することでブランドが広まり、高知県の産業振興につながるのではないか。価値の継続のためにも少しずつでも出す必要がある。製材技術の育成基盤を残す必要がある。

ヤナセ天然スギの資源状況について、厳しい状況を認識する必要がある。休止の提案は平成30年からとなっているが、すぐにでも休止して欲しい。ブランドのあり方や技術の継承も含め、今の人工林をどう活用していくのか。天然林をどのように保護していくのか。この検討委員会に引き続き検討の場を設置して調査、議論をお願いしたい。

この地域には天然スギのみならず、トガサワラなどの貴重な樹木もある。ヤナセスギは県木とはいえ身近な存在となっていない。広く県民に歴史や文化について啓発することが大事ではないか。千本山のヤナセスギには立ち枯れが多くなっていると聞いている。それらの保全など早め早めに取り組んでもらいたい。

木曾ヒノキの保護地区は何千 ha もあるが、それと比べてヤナセスギは面積も量も少なく、伐採を 20 年も続けるのは難しい。技術継承を考え、毎年の伐採・出材でなく 4 年又は 5 年の隔年で事業を行うのも 1 つの方法でないか。

ヤナセスギは県や村の財産であり、この資源と技術を守り育てていきたい。建築業界でヤナセスギのような銘木を使うところが減ってきているのも事実であるが、林業に携わる者としては継続的な取組みをお願いしたい。人工林につないでいくのであれば、20 年の空白期間について、なんとか続けられるようお願いしたい。

伐採技術の継承は、最低限どのくらいの量があれば可能なのかなどについて、森林組合と意見交換をして示して欲しい。また、人工林を 130 年を待たずに出材することは可能なのか。需要サイドの反応も含めた検討が必要。